

巻頭言

— 大学の情報関連部門の再編統合と学術情報基盤整備 —

群馬大学総合情報メディアセンター長 中里 洋一*

学術情報処理研究誌は大学の高度情報化に向けた研究論文を毎号掲載し、総合情報処理センター関係者のために貴重な研究発表と情報交換の場を提供してきました。このたび本誌の巻頭言を書くことになり、いささかの不安と逡巡を覚えておりますので、その訳をここで述べさせていただきます。

国立大学の法人化とともに組織の再編統合の自由度が格段に増し、各大学はその理念目標に基づいて組織の見直しを進め、個性輝く大学としてのアイデンティティの確立に知恵をしぼっています。総合情報処理センターに関連するものとしては、平成 11 年の学術審議会答申にある「情報関連組織の連携強化、再編一体化」の方向に沿って、7 大学に情報基盤センターが政策的に整備されてきました。この流れは法人化後は個々の国立大学法人のもとでさらに加速するものと考えられます。筆者の大学でも 17 年 4 月に、これまで情報の基盤整備、維持管理、提供サービスを行ってきた 3 部門、すなわち附属図書館、総合情報処理センター、事務局総合情報システム室、を再編し、「総合情報メディアセンター」として統合させました。この総合情報メディアセンターは、図書館と情報基盤部門と事務情報部門からなる独立した部局であり、教育・研究組織のひとつとして位置づけられています。事務は事務局研究推進部に新設された総合情報メディアセンター課（10 係、スタッフ 34 名）が担当しています。この再編統合の目的は、統一的なポリシーに基づいて大学情報基盤を整備し、情報の一元化を図ることです。発足と同時に、情報セキュリティを専門とする専任教授を民間より迎えることができ、初期の目的に向かって組織が動きはじめております。さて、このセンター長ですが図書館長が兼任することになり、3 月まで附属図書館長であった筆者が 4 月よりセンター長に着任した次第です。総合情報処理センターには関りのなかった医学部出身者が突然センター長になり、このたびこのような情報処理専門誌の巻頭言を書くことになってしまったことが冒頭で述べた不安と逡巡の理由です。

ところでネットワークシステムの急速な発展と情報処理技術の高度化は、医学・医療の領域にも目覚ましい進歩をもたらしています。遠隔医療、遠隔診断はその最たるものといえます。たとえば筆者が行っている脳腫瘍の術中診断では、隣接県の脳神経外科専門病院で行われている腫瘍開頭摘出術の手術中に、執刀医が一部の腫瘍組織片を摘出し、それを検査技師が凍結切片法という方法により顕微鏡標本を直ちに作成して、遠隔操作の可能な顕微鏡にセットします。筆者は大学の研究室からウェブブラウザ画面で顕微鏡の視野と拡大倍率を次々と変えながら画像を観察し、腫瘍の名前と悪性度を診断し、電話または電子メールによって病院の執刀医に診断名を伝えています。脳腫瘍の組織片が摘出されてから診断が下されるまでに要する時間は約 20 分です。脳外科医はこの診断に基づいてさらに摘出術を続行するか、あるいは摘出を中止して、放射線療法や化学療法を選択するかを判断しています。このように専任病理医のいない中規模病院でも、大学病院と同じレベルの診療が可能になっている背景には、ネットワークを利用した情報通信技術の進歩があることがわかります。現在の FTTH 回線とインターネットを介した画像転送では遠隔操作をしてから顕微鏡画像が転送され表示されるまでに約 2 秒を要しますが、学内外の情報通信ネットワークの高速化に伴って、より円滑な顕微鏡操作とリアルタイムの画像表示が可能になると期待されます。情報基盤整備は大学の社会貢献のためにもさらに推進させる必要があります。

大学の総合情報処理センターは、中長期的視野のなかで学術情報基盤の在り方を見据えながら、限られた予算のもとに基盤整備を推進し、あわせて情報セキュリティの確保をしなければならないという、難しい局面に立たされています。本誌を通じて大学相互の情報交換と技術スキルの向上が図られることは、現在の状況の中できわめて意義深いことと思われれます。